ブラウンの家庭科教育理論の構成概念に関する一考察

広島大学大学院教育学研究科　林　未和子

キーワード：マージョリーM. ブラウン　家庭科教育理論　家族の行為体系　実践問題解決

[要旨]

本論は，アメリカで高く評価されているブラウンの家庭科教育理論の解明を意図している。ブラウンの家庭科教育理論は，学習者，知識，社会の概念から成る教育の視座と家族に関する概念を明確にして，家庭科教育の目標と内容を決定するための概念体系を提示するものであった。ブラウンは，家族を個人の自己形成と社会形成に参与する能動的な行為者とみなし，家族の行為体系を家庭科の中心概念としている。家庭科教育の目標は，家族の幸福に向けて，思考と行為において自己決定できるよう，家族構成員としての個人の発達を援助することであり，その内容は，家族の永続的な関心事の観点から実践問題を媒介として構成されている。ブラウンの理論に基づく家庭科カリキュラムでは，実践問題の解決過程を探求する方法を学習させることにより，家族の行為体系についての概念形成，批判的な思考力，推論に基づく倫理的な意思決定能力が育成され，正しく認識し，道理にかなった行為がとれるようになると考えられている。

1．はじめに

男女共学という歴史的な転換期を迎えたわが国の家庭科は，実践についての反省とともに，理論の再構築が模索されている。そのため，家庭科教育理論の探究が緊要の課題となっており，国内外を問わず新しい家庭科教育の理論が求められ，それらを解明する必要性が高まっている。このような状況のもと，本論は，アメリカにおいて高く評価されているブラウン（Marjorie M. Brown）の家庭科教育理論を解明することを意図するものである。

ブラウンは，学問としての家政教育学のあり方を問い直し，歴史的・哲学的な考察からその概念枠組みの再構築という難問に取り組み，家政教育学の確立と家庭科カリキュラム研究への理論的基礎を築いた人物である[1)]。ブラウンは，アメリカ家政学会の年報等[2)3)]の紙上において，解釈学的な視座を包含した批判哲学のパラダイムを導入し，家庭科教育理論に知的革命をもたらしたと評されている。また，ブラウンの理論的枠組みは，ペンシルバニア，オハイオ，ミネソタ，ウィスコンシン，メリーランド，ネブラスカなどの多くの州で採用され，特色のある家庭科カリキュラムが開発されている[4)]。

このように，ブラウンの理論は，アメリカの家庭科教育に多大な思想的影響を及ぼしており，そ

の研究業績は多方面にわたっている。しかしながら，わが国には，ブラウンの初期の頃の著作の簡単な紹介はされているものの[5)6)]，今日までに到達した理論の全体像や詳細な中身についてはほとんど明らかにされていない。それは，ブラウンの著書や論文の中で家庭科教育に焦点化した一つの理論が系統的に論述されていないため，またその理論が難解であるためと思われる。

そこで，本論は，ブラウンの家庭科教育理論の解明を目指して，理論を構成する概念について考察し，ブラウンの理論の特徴，家庭科教育の理念や目標，性質等を明らかにすることを目的とした。

2．前提となる人間観と教育の視座

ブラウンは，これまでの家庭科教育の概念が曖昧で混沌としていたことを指摘し，家庭科教育を理論的に究明するにあたり，家庭科教育の概念の明確化の重要性について論究している。そして，家庭科教育の理論的根拠をなす重要な基礎的研究は，教育の立脚すべき人間観と家庭科の依拠すべき教育の視座を明確にすることであると考えている。なぜなら，人間存在をどのようなものとみるかによって教育のあり方が変わってくるし，教育それ自体をどのように捉えるかという教育の視座は，教育の人間形成的意義は何かという根源的な問いに対する信念や価値を規定するからである。それゆえ，本論では，まず前提となる人間観を吟味し，教育の視座を明らかにすることが肝要であると思われる。

ブラウンは，「人間は意識を有しており，潜在的に理性的で倫理的な行為者である。」[7)]という原則に立つ。人間は，他の人間と関係を結び，世界と関係を結んで生きている。その生活世界において，言語という記号体系を用いて，コミュニケーション活動や認識の形成を行っている。個々人は，生活世界における自然環境のみならず社会文化的環境との相互作用を通して，言語記号を媒介としながら，自分の世界を解釈し行為するのであるから，倫理的な行為をとるためには，正しく理性的に思考し，結果に対して責任を持つことが前提とされるのである。

このことは，とりもなおさず人間形成は，その人自身の能力とその人が生活している世界との相互作用を通して，歴史的に達成されるということである。既にある生活世界に生まれた人間は，感覚による認知，言語による概念化，生活規範への同化および複雑な思考によって，自分と世界に対する理解を深め，成熟したアイデンティティへと到達する。それは，個人の認知的形成過程であると同時に，個人と相互作用する社会システム（家族，学校，地域社会等）との歴史的な形成過程でもあり，人間は両過程に参与することになる。

人間は，自分自身の行為によって未来を創造することができる存在であるが，その希求される未来像は，いわゆる幸福（well-being）である。幸福とは，人間の基本的要求が全体的に満たされるような具体的な条件を必要とするが，要求の充足によってもたらされるものというよりも，喜びを感じるようなことを実際に行うことにその本質が存する。つまり，幸福は，喜びをもたらすような経験の質に依存しているのである[8)]。

成熟したアイデンティティへ到達した個人は，自らの幸福を追求するのみならず，他人の幸福をも配慮できる人間である。この個人の持つ倫理的な志向性，すなわち，日常生活の行為において自

律と責任を果たそうとする意思は，自由の根底にある道理に基づくものである。

このように，ブラウンは人間を，自分の行為によって自己形成する存在，関係性の中で発達する存在，幸福を求めて行為する存在とみている。この主体的で全体的かつ能動的な人間観に立脚して，ブラウンは，学習者，知識，社会の概念から教育の視座を次のように捉えている[9)10)]。

学習者は，自分の置かれた環境の適切な状況との相互作用によって成長・発達する。学習は，意味を構築することである。学習者は，意味と行為を探求することにおいて，自律的・批判的かつ創造的に思考する人である。学習者は，自己を形成したり，自己決定したり，道理にかなった倫理的な行為をとることができる。特に教育の場においては，他者との相互作用を通して，自分の意識的な思考に能動的に従事したり，思考方法を変革したりする。知識を獲得し，認識に至る過程は，他者との分析的な対話を通して批判的に再構築され，その結果，自分自身の考え方（思考方法）を自己反省することができるようになるのである。

知識は，認識される中身（思考内容）と能動的に認識する過程（思考方法／思考過程）の両方から成る。生活状況を分析し，批判し，新しい洞察を生み出し，問題を解決する過程において，知識は統合され，実生活において機能する能力となるのであるが，確立された知識も，認識する人による能動的な思考過程を通して絶えず再構築される。換言するならば，何かを知るということは，行為主体としての人間が自分で探求し，理解し，知識として得られたものを再構築したり使用したりする意識的で個人的かつ能動的な過程である。それは，情報を従順に受け入れたり，物事を表面的に熟知することではなく，認識対象を介して現実と向き合うための思考過程を要求するのである。

社会は，人間の行為を通して創られ制御される様々な人間組織から成り立っており，時空間的に人間が生み出した歴史と文化を有する世界である。文化や社会制度は，人間の知性によって創り出されたものであるから，共同の努力によって改善することができる。種々の社会システムのそれぞれ（家族，地域社会，国家等）は，一つの行為体系である。自由社会は，個人の自律的で責任のあるアイデンティティの発達と相互依存関係にある。

ブラウンは，上述の学習者，知識，社会の概念を統合して，教育を主体と主体との相互主観的な関係と捉え，独自の意識と経験を持つ主体の長期的な発達に継続的に関与する行為であるとみなしている。また，教育は，教師と生徒および生徒同士の相互作用を通して，より大きな社会組織の現実の状況や，学校あるいは社会的な背景のもとで行われるのであるから，歴史的-社会的な過程でもあると言明している[11)]。

このような教育の視座に拠るならば，「教育された人間」はどのように概念化されるであろうか。ブラウンは，教育された人間の概念を以下のような３つの観点からまとめている[12)]。

(1) 教育された人間は，何等かの目的を持って価値ある物事に深く関与することができる。

(2) 教育された人間は，道理にかなった知識と理解および理解に相応した感情を持っている。

(3) 教育された人間は，全体的な視野を持っている。

つまり，教育は，知識や活動に内在する価値を認識し，行為に対して道具的でない態度をとり，全体的な視野から知識を統合して，それらを使用して能動的に生活に参加することができるような

人間形成を目指しているのである。それは，その人の既有のものをもとに，より新しい関心を発達させ，新しい価値を開眼させる主体と主体との相互主観的な行為である。

3．家庭科教育の概念体系

人間教育の一端を担う家庭科教育は，教育の理念や目標と整合する教科独自の人間形成原理を有するはずである。その人間形成原理にしたがって，家庭科教育の概念体系は，家庭科独自の枠組みでもって家庭科教育の目標と内容を導き出そうとするものである。

家庭科教育の知識の源泉が家政学にあることは一般に承認されているが，ブラウンもまた支持している。ブラウンは，家政学の歴史的役割とその発展過程を検討して，家政学の学問的性格と体系を明らかにし，次いで，前述の教育の視座に基づいて家庭科教育の概念体系を構想した。以下，ブラウンの辿った道筋を経て，家庭科教育の概念体系を明らかにしていく。

「家政学」は，アメリカにおいて，1899年から10年間継続して審議されたレイクプラシッド会議に端を発し，アメリカ家政学会（AHEA）のもとで存続してきた学問である。ブラウンは，その歴史的な経緯を概観し，「家政学」は，一貫して「個人的奉仕専門職」であり，教育的性格も併せ持っていたとしている[13]。そして，「家政学は，その専門職としての奉仕と知識の基礎が，家族を中心とする人間についての関心事から発生しており，家族および家族の一員としての個人の幸福を志向して家族の問題の解決を援助する分野である。」[14][15]と結論づけている。

そこで，ブラウンは，そのような背景をもつ家庭科教育の対象領域を「家族を中心とする人間の生活」とし，家庭科教育の概念体系を家族を鍵概念として構想している。

それでは，ブラウンは，家族をどのように捉えているであろうか。ブラウンは，「家族は，家族内および家族外の世界との行為によって特徴づけられる個人から成る一つの人間集団である。また，社会を構成する単位としての家族は，社会的な行為体系の一つである。すなわち，家族は，個人的な行為とともに集団としての行為の両方に従事する相互に依存し合う構成員から成る社会的な組織である。」[16]としている。この論述にもみられるように，ブラウンのいう家族は，社会を構成する単位として規定されているにすぎず，いわゆる血縁とか婚姻による閉鎖的な近代家族を意味するものではない。ブラウンは，家族を自己形成および社会形成に貢献する変化の担い手として概念化している。

図1は，変化の担い手としての家族に関する概念体系を示している。家族は，啓発，批評，自己反省，対話，行為等によって，家族の問題を解決する過程に携わり，（後述する）家族の行為体系を維持・発展させる。それは，成熟した主体を形成し，支配的な観念と理想を変化させ，経済的・政治的な組織を変革する原動力となりうる。つまり，家族は，啓蒙的・批判的な熟考とコミュニケーションを通して家族の行為体系を形成すると同時に，自己形成と社会形成のプロセスにも関与しているのである[17]。

家族は，個人の成熟した自律と責任の発達を通して，また自由社会の形成に参加することを通して，人間の幸福に貢献する[18]。すなわち，家族の幸福を実現するためには，成熟したアイデンティ

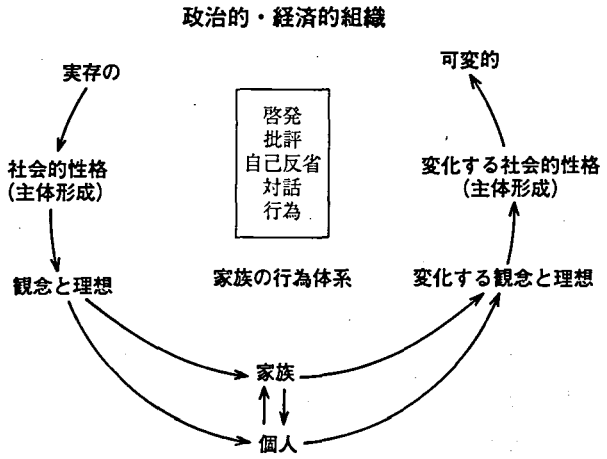

図1　変化の担い手としての家族に関する概念体系
(Marjorie M. Brown. *Home Economics: A Definition.* 1979, p53より)

ティの達成という個人の人格の発達と，人間の幸福に向けての自由で公正な社会の形成という二つの条件が同時に満たされなければならないのである[19]。その時，個々人の成熟した自律と責任の発達を促し，自由で民主的な社会構造としての家族および社会の形成に貢献する家族の行為体系を構築することが家族の主要な役割となる。

このように，ブラウンは，家族の行為体系における家族の存在のありようをみていこうとしたのであり，そこに，家庭科教育内容を構成するための枠組みを見いだしたのである。

それゆえ，家庭科教育においては，家族の行為体系に及ぼす社会-文化的な影響力を批判的に認識させるとともに，家族内の活動および家族による行為が，個々人，家族，そして社会の歴史的な発達に対して持つ関係を学習者が理解できるようにすることが重要である[20]。それは，家族を見る個人の見方，家族と社会との関係や家族と文化との関係を見る個人の見方を変革する概念体系を発達させることに他ならない。しかも，その概念体系は固定的で不動のものではない。個人は，信念，価値判断および行為が正当化されるような道理に基づいて概念体系を使用し，成熟へ向けて発達するのであるが，その人が変化する過程において，概念体系自体も変革されるのである。家族に関する広い認知的能力やコミュニケーション能力，また成熟した道徳意識をより発達させ，自身の感情と動機の適切な解釈を現実化することによって，個人は，(1)その人自身の家族生活においてより賢明かつ幸福となり，(2)家族一般の幸福のために，また，自由社会への発展のために，他者との関係を築いていくことができるようになると考えられている[21]。

以上より，家庭科教育の目標は，家族構成員としての個人が家族の幸福の実現に向けて，社会的な基準や規範の批評と吟味に啓発的・協力的に参画することによって，家族の行為体系を維持・発展させることができるよう，学習者の自己形成という長期的な発達過程を援助することであると解釈できる。

このように，個人と社会の双方の側面から，伝統的な家政学の家族概念を捉え直した点が，ブラウンの新しい視点である。しかも，家族の行為体系を中心概念に措定していることも新しい発想である。

4．中心概念としての家族の行為体系

それでは，家庭科教育内容の中心概念である「家族の行為体系」とは，どのようなものであろうか。ブラウンは，知識と実践は日常生活において一体化されるとするハバーマスによる言説を支持し，家族の行為を三つの意味合いから分類して，家族の行為体系とした。

ブラウンは，家族の現実生活は次に挙げる三種類の行為が複雑に絡み合って織り成される営みと考えている。その家族の行為とは，目的合理的な行為，解釈的な伝達行為および解放的な思慮深い行為であり，次のように説明されている[22]。

(1) 目的合理的な行為;技術的な手段となる行為とも言われ，生活する上での基本的な要求を満たすための活動（方法に関する知識や仕事等も含む）。

(2) 解釈的な伝達行為;家族を含めて社会・文化的な生活における相互主観的な理解（共有されたまた推測された意味，価値，信念，態度など）。個人のライフヒストリー，家族史や文化的な伝統，異なる文化の相互理解，コミュニケーションによる意味，意図，要求，目標，価値の解釈を含む。

(3) 解放的な思慮深い行為;自分の生活を統御する能力と自発性を発揮した活動。家族内の権力関係，社会的な矛盾，独断的信念，抑圧などを批判的に吟味して，観念や行為の対立などを弁証法的に解決するためになされる行為。

日常生活においては，多種多様な行為が相互に関連しているが，それらを分類整理してみると，意味ある行為は上述の行為に同定できる。例えば，よりよい生活のために，家族の物理的要求を満たそうとする行為は，目的合理的な行為である。いわゆる家庭の仕事はすべてこの範疇にはいる。よい生活を定義することや，価値や目標の形成および決定における理解と合意のために，家族内および家族外の社会集団との意思疎通をはかるコニュニケーションは，解釈的な伝達行為である。さらに，独断的な信念や支配的で搾取的な社会勢力を批判して，それらから個人，家族，社会を自由にする行為を解放的な思慮深い行為という[23]。

家族の問題の源と性質は，個人的-社会的-文化的な文脈に根ざしており，その実質は，家族の行為体系を検討する時，より一層明確になる[24]。このような立場から，ブラウンは，日常生活において複雑な様相を呈す家族の行為体系を概念化し，その概念を思考過程に取り込んで問題解決において使用することができるよう，家庭科教育内容は，家族の行為体系に関わる問題に基づいて組織化されるべきであると提案している。

5．実践問題解決過程における実践的推論

ブラウンは，家族の行為体系において具体的に現れる家族の問題を実践問題として把握している。

実践問題は，個人と家族が時空間を越えて直面するという意味で永続的な性質を持っており，人間の要求を根底に据えた家族の永続的な関心事の点から定義される。家族の永続的な関心事は，人間の存在意義に関わる家族の問題領域内にあり，時間を越えて連続し，世代を越えて繰り返される人類共通の本質的で普遍的な問題から派生するものである。それは，子どもの養育，食物，衣服，住居，性および出産など家族に関する具体的な日常の問題[25]を扱いながら，意味の構築，価値の形成，コミュニケーション体系の学習，人間関係の発達など人間生活における包括的で一般的な問題[26]へと行き着くことができるよう，個人と家族にとっての意味の観点から，またその人自身の歴史的・社会的・文化的な影響を考慮した上で解決していくことが求められるような問題である。

この家族の永続的な関心事を具現化した実践問題の探求過程においては，家族の行為体系の概念的な理解，推論を用いた思考，行為に対する方針決定が必要とされる。さらに，実践問題を解決すべく，人間の尊厳と自由を尊重する解放的な行為をとるためには，人間の価値と理解を共有する伝達行為と，目的達成への手段として技術を用いる行為が不可欠である。

そもそもブラウンは，実践（practice）という概念を，道理にかなった行為を意味するものと捉えている[27]。これは，プラトンやアリストテレスが行為を導く practical reason を実践的判断力として重視して以来，長い歴史的変遷を経て培われてきた意味である。カントもまた，practical reason の重要性について論じているが，彼によれば，reason は，意志や感情を内含するものであり，practical reason は，理論的あるいは科学的に実証できない信念を含んでいる[28]。このような意味で，practical reasonは，自発的な決定と行為に関わる反省的思考（熟考された思考）に基づくものであり，その意思決定過程においては，推論の拠りどころとなる価値が重んじられる。結局のところ，実践は，人間による意識的な行為，なかでも，理にかなった行為を包含する概念として用いられているのである。

実践問題とは，意思決定が要求されるような状況における行為と関係しており，価値判断や行為に対する結果が問われるような問題である。それは，「どのような意思決定がもっとも適切であるか」「どのようにしてこの問題は解決されるべきか」「私あるいは私の家族はどんな行為をとるべきか」といった問いの形をとる[29]。これらの問いに応えるためには，行為の他人に及ぼす長期的な結果を見据えた上で意思決定したり価値判断することが要求され，家族の行為体系の内奥に潜む本質を見極める洞察力やある条件のもとでどうすべきかを的確に判断する能力が必要となる。すなわち，実践問題は，自動的あるいは習慣的な反応では対処できない問題であるから，実践問題を正しく認識し，解決するためには，問題解決の方法を学習しなければならないのである。それゆえ，実践問題の解決過程に関する概念は，家庭科教育内容を構成する際に熟慮すべき要となる概念であると同時に，学習者が実践問題を解決するのに必要な能力を概念化したものと捉えることができ，実践的推論の構成概念が骨子となっている。

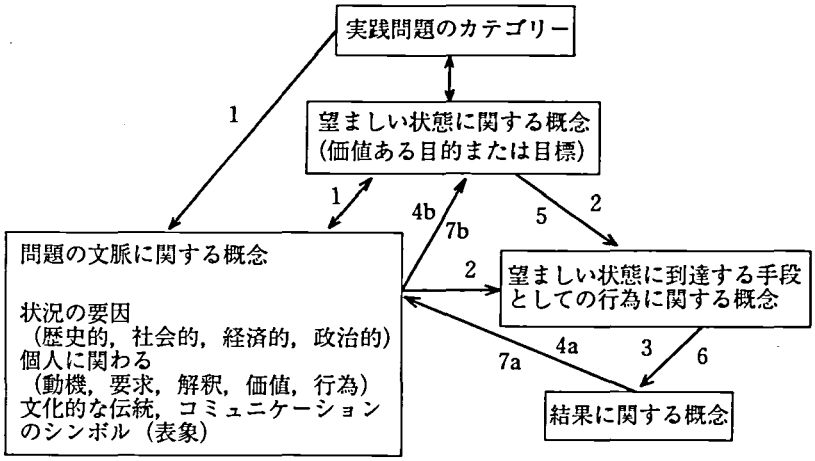

図2　実践的推論の構成概念
(Marjorie M. Brown. *Home Economics: A Definition*. 1979, p56 より)

図2は，実践問題の解決過程における実践的推論の流れをあらわしたものである。まず，人間生活の質に関する価値ある目的が達成すべき目標として確認される。これらの目的・目標は，個人的（動機，要求，解釈，価値，行為）・社会的（歴史的，経済的，政治的状況）・文化的（伝統，コミュニケーションのシンボル）な文脈において吟味され，望ましい状態に到達する手段としての行為へと概念化される。そして，実行可能な行為によって起こりうる結果が予測され，結果と目的あるいはその問題の文脈が矛盾していないかどうかが判断される。目的と結果が著しく相違したり，結果が文脈において受け入れられないものであるならば，フィードバックが繰り返され，修正されていく[30]。

以上より，ブラウンの理論に基づく家庭科教育は，家族の行為体系についての概念を形成し，実践問題の解決方法を探求する一連の過程を通じて，学習者が家族一般（自分自身の家族を含むがそれに限定されない）に関する状況や問題を正しく認識し，道理にかなった行為をとることができるよう，理解，価値および全体的な視野を発達させることを主眼としていた。そのため，家庭科カリキュラムでは，概念形成を土台とする思考過程に重きがおかれ，推論や対話といった自己反省と他者との相互作用が方法論に用いられている。それは，実践的推論を認識過程の中に適切に位置づけることによって，自律的，批判的かつ創造的な思考力と的確な判断力を育成し，その倫理的な意思決定能力を根幹として，問題解決への手段となる技術や行為への態度も養うものであると言えよう。

6．結論

ブラウンの家庭科教育理論は，家庭科の依拠すべき教育の視座と家庭科の本質に関わる概念を明確にすることによって，家庭科教育の目標および家庭科教育内容を決定するための概念体系を提示するものであった。ブラウンは理論を確立された知識の体系というよりも，信念と実践に内在する

本質的な意味を概念化して，その関連を体系的に示したものと考えている。それは，研究と教育とを統合する行為実践のための理論を示唆しており，理論と実践の相互補完的な関係性を重要視する見解である。行為に内在する理論を明らかにするためには，行為実践への理論的根拠となる概念を論理的な考察に基づいて分類整理して，それらの関連構造を解明しなければならないのであり，ブラウンが家庭科教育の概念体系を明確にしようとした理由がここにある。

つまり，ブラウンは，家庭科教育理論の探究は，概念体系の構築により完結されるのではなく，家庭科教育の研究が実践に対して寄与しうるものであるかどうかという観点から，概念体系の妥当性を常に吟味し，理論自体を修正・改善していくプロセスが重要であると考えているのである。そして，理論と実践，認識と行為を二元論的に分断するのではなく，両者の力動的な関係を保持しつつ，それらを弁証法的に統合可能なものとみなしている。

ブラウンは，家庭科教育学研究と家庭科教育実践とが共通の基盤において関わり合っていけるような教科教育理論の構築を目指しており，両者を結合するカリキュラム理論をも展望していた。それゆえ，人間の本質，教育固有の価値，人間形成の意義という根源的な概念の考察に始まり，家族，社会，生活世界といった個人を取り巻く世界観に言及し，家庭科教育のあり方を再検討したのである。

家庭科教育の目標は，家族の行為体系における問題の解決能力を育成することによって，家族の行為体系に適切に関わっていけるような家族の一員としての個人の自己形成を援助することである。ブラウンによれば，家族の幸福は，家族を中心とする人間生活の質の向上に向けて，成熟したアイデンティティを持つ個人の自己形成と人間の尊厳が尊重されるような自由で公正な社会の実現を絶えず志向する行為そのものの中に見いだされる。したがって，家族の幸福を志向して思考と行為において自己決定できる人間の形成を目指す家庭科教育では，個人と社会の間に介在する家族に焦点を合わせ，家族の行為体系を中心概念に据え，実践問題を生活世界という現実と向き合うための媒介として用い，実践問題解決への探究過程をたどらせることにより学習過程が組織化されている。

家庭科における実践問題の特徴は，それが人間の存在意義に関わる家族の永続的な関心事から導き出されているため，家族の生活と家族内の人間関係およびその相互関係に含意されている本質へとつながっているということである。それゆえ，実践問題の解決に際しては，個人的・社会的な観点から，また歴史的・文化的な文脈の中で，複数の多様な選択肢について吟味し，行為の結果を考慮して意思決定し，結果を価値ある目的に照らして評価するという実践的推論過程が鍵を握っているのである。

以上のように，ブラウンの家庭科教育理論は，主体的で全体的かつ能動的な人間観に立脚した教育の視座を採用し，個人と社会の相補関係に着目して知識の捉え直しを図り，概念的知識としての認識内容と思考技能を用いた認識過程の両者から家庭科教育内容を構成しようとするものであった。このように，従来にない新たな視点から概念を吟味し，再構築した家庭科教育理論は，カリキュラム開発にとっても有効なものとなっている。

1980年代以降，ブラウンの家庭科教育理論を理論的な枠組みとして各州で独自のカリキュラムが

開発されて現在に至っているので，ブラウンの理論が各州の家庭科カリキュラムにどのように反映されているかを検討することを今後の課題としたい。

〈引用文献と注〉

1) "AHEA Today : 1992 Distinguished Service Award Recipients." *Journal of Home Economics*, Vol. 84. No.4, 1992, pp. 56-57.

2) Marjorie M. Brown. *Philosophical Studies of Home Economics in the United States* (Vol. I and II), East Lansing, MI : Michigan State University, 1985.

3) Work and Family : Educational Implications. *American Home Economics Association Teacher Education Yearbook 11*. Peoria, IL : Glencoe Publishing Company, 1991.

4) Hultgren, F.,& Wilkosz, J. "Human goals and critical realities : A Practical problem framework for developing home economics curriculum." *Journal of Vocational Home Economics Education* No. 4(2), 1986.

5) 今井光映『家政学原理』ミネルヴァ書房 1969 pp. 303-305.

6) 丸島令子 「アメリカの家政学教育」今井光映編『家政学教育の発展』ミネルヴァ書房 1972 pp. 111-112

7) Marjorie M. Brown. *What is Home Economics Education ?* Minneapolis, MN : University of Minnesota. 1980, p. 117.

8) Ibid. pp.44-45.

9) Marjorie M. Brown. *A Conceptual Scheme and Decision Rules for the Selection and Organization of Home Economics Curriculum Content.* Wisconsin Department of Public Instruction, 1978.

10) Marjorie M. Brown. *What is Home Economics Education ?* Minneapolis, MN : University of Minnesota, 1980.

11) Ibid. pp. 97-98.

12) Ibid. pp. 91-97.

13) Ibid. p. 82.

14) Marjorie M. Brown. *A Conceptual Scheme and Decision Rules for the Selection and Organization of Home Economics Curriculum Content.* op. cit. pp, 14-15.

15) Marjorie M. Brown. *What is Home Economics Education?* op. cit. p. 41.

16) Ibid. p.49, p. 56, p. 61.

17) Marjorie M. Brown, & Beatrice Paolucci. *Home Economics : A Definition.* American Home Economics Association, 1979, p. 52-54.

18) Marjorie M. Brown. *What is Home Economics Education?* op.cit. p. 58.

19) Ibid. p. 78.

20) Ibid. p. 118.

21) Ibid. p. 104.

22) Ibid. pp. 62-66.

23) Ibid. p. 101.

24) Ibid. p. 56.

25) Ibid. p. 59.

26) Hultgren, F., & Wilkosz, J. op.cit. p. 142.

27) Marjorie M. Brown, & Beatrice Paolucci. op.cit. pp. 24-25.

28) ブラウンは文献9)のp.16および文献17)のp. 25においてカントの著作「Critique of Practical Reason (1788年)」について触れている。

29) Janet F. Laster. "Instructional Strategies for Teaching Practical Reasoning in Consumer Homemaking Classrooms." *Higher Order Thinking Definition Meaning and Instructional Approaches* (Ruth Thomas, Editor). Washington, D.C. : Home Econoics Education Association, 1987.

30) Marjorie M. Brown, & Beatrice Paolucci. op.cit. p. 54,pp. 56-57.

(1994年9月1日受理)

[Abstract]

A Consideration on the Constitutional Concepts of the Theory of Home Economics Education of Marjorie M. Brown

Miwako Hayashi

This paper aims at clarifying the theory of home economics education of Marjorie M. Brown. Her contribution in home economics education is highly appreciated in the United States. In her theory, she described the educational perspective which is composed of the conceptions of the learner, knowledge and society and conceptions regarding the family. Moreover, she stated the conceptual scheme which decide the goal and content of home economics education. According to Brown, since the family is regarded as an active agent involved in the self-formation of the individuals and the formation of the society, then the concept of the systems of action in the family can be considered of major importance to home economics education. The goal of home economics education is helping the development of individuals as family members to become self-

directing in their thinking and acting toward well-being of the individuals within home and the family. Being grounded on the theory of Brown, the content of home economics education is organized around practical problems used as a vehicle from the viewpoint of perennial concerns to the family. By learning ways of solving practical problems, the learners will inquire into the processes which include conceptualization of the systems of action in the family, critical thinking and ethical decision-making based on reasoning that could provide them with a basis for the rational thought and reasoned action.